

礼拝さいころ

第6回 賛美歌検討委員会議主催研修会講演録

教会をつくりあげる賛美歌の言葉 天皇制用語をめぐって

2015年2月22日に賛美歌検討委員会議主催の賛美歌研修会が開催されました。賛美歌検討委員会議では『新生讃美歌』の曲ごとの評価を継続していますが、課題の中でも賛美歌の中に散見される「天皇制用語」について学ぶことの必要性があげられ、2014昨年度は恵泉教会の辻子実氏の講演を通して、そして、今回は賛美歌と「天皇制用語」に関する著書を多数執筆されている、改革派の牧師、石丸新氏をお招きし学ぶ機会が与えられました。東京近郊から55名が目白ヶ丘教会に集まり、先生ご自身の戦時中受けた教育と、賛美歌の中で歌われる「みいつ」「みたま」の解釈とその関連、また、戦いを二度と学ばない平和な世界を願う思いが語られ、また詳細にわたる資料を紹介していただきつつ学ぶ貴重な研修となりました。諸教会・伝道所の皆様にお分かちたく、ここにご紹介いたします。

私たちの賛美歌集の言葉は、神をほめたたえる言葉としてすべてが相応しいのでしょうか。日本で歌われてきた賛美歌の多くは、欧米の賛美歌の翻訳とその影響を受けて創作されてきたもので、その翻訳や創作の際に、天皇制を支える社会思想の中で言葉が選択されてきました。このような歴史を持つ私たちは、今日、教会から発している賛美の言葉と、丁寧に向き合い、吟味する必要に迫られているのではないのでしょうか。諸教会・伝道所の中で私たちの捧げる賛美歌を学び合うために、この講演を参考にされ、私たちの主告白である賛美の言葉の中身を深く見詰め、研修していく機会としてお用いください。（レジュメは13-20ページ）

講師紹介 石丸新（いしまるしん）

1931年、福岡県に生まれる。少年期を現・韓国で送り、1946年、日本に引き揚げる。四国基督教学園（現・四国学院大学）卒業。神戸改革派神学校卒業。米国コロンビア神学校修士課程修了。日本キリスト改革派多治見教会牧師、

仙台教会牧師、四国学院大学文学部教授（新約学）、湖北台教会牧師を務める。現在、日本キリスト改革派教会東関東中会引退教師、四国学院大学名誉教授。東京都東村山市に在住。著書：『賛美歌にあった「君が代」』（新教出版社）、『賛美歌に見られる天皇制用語』、『戦時下の教会が生んだ讃美歌』（いのちのこば社）他。

講演： 教会をつくり上げる賛美歌の言葉

天皇制用語をめぐる

石丸新

1. 「ミイツ」を耳にして何を思い浮かべるか

1954年版の『讃美歌』第7番『主のみいつとみさかえとを』これを聞いて、「みいつ」というのは三位一体のことと思った方がおられます。実際にそういうことを耳にいたしました。先ほど歌いました『新生讃美歌』第3番では「あがめまつれうるわしき主／歌いまつれみ栄え」と、非常に注意深く「みいつ」という天皇制用語を避けて「み栄え」、このように一同で歌っているのです。「みいつ」とは一体何であろうか。中学3年生で耳にして、「みいつ」とは何かということの説明できる生徒はおそらくいないのではないだろうかと思います。

別の曲ですが、日本福音ルーテル教会の『教会讃美歌』127番を見ますと、「さかえに輝く三一（みいつ）なる神よ」と、確かに「三一」と書いて「みいつ」とルビを振っていますから、「みいつ」を耳にして、これは三位一体だと思えるのも無理はありません。

別の曲であります、『新生讃美歌』の343番では、これは「三一（さんいつ）の神」。「さんいつ」とルビを振ってありますので、耳で聞いて、目で見て、これは三位一体だということが、はっきり分かるのです。

『新生讃美歌』は、全ての漢字にルビを振りました。非常に丁寧な編集であると、心から感謝しております。小学生でもきちんと歌詞を口に出して歌うことができる。そればかりか、外国人の方が教会に來られて賛美歌を開いて一同で賛美をする、この時にルビの果たす役割はきわめて大きいのです。『新生讃美歌』をよく勉強いたしました、聖句の引用

の索引であるとか、用途・項目の索引であるとか、非常に完備されておりまして、そういう意味では『讃美歌21』にまさる点がこの『新生讃美歌』には多くあると、心から感謝しております。

次に、私が初めて「みいつ」を耳にしたのはいつであったのか、「アジア」を耳にしたのはいつであったのか。実はこれは1937年のことでありました。あえて昭和で言いますと昭和12年。当時わたくしは朝鮮半島に住んでいました。父が日本人教会の牧師をしておりまして、ソウルのすぐ近くのインチョン市（当時は日本語読みで「じんせん」と言っていた）、そこで小学校に入学をしましたのが昭和12年の春のことでした。やがて2学期になり、秋が近づき「明治節」の歌を教室で習いました。そして講堂に行って予行演習し、やがて11月3日の本番です。明治節、「亜細亜の東日出づるところ／聖の君の現れまして」。お見受けしますと、この中で5～6人位がこれを歌えると思います。（笑）「亜細亜の東日出づるところ…」小学校1年生が1番から3番まで全部覚えて、上級生と一緒にこれを歌ったんですね。「亜細亜」、アジアが何であるか、小学校1年に入ったばかりで充分には分かりませんでしたけれども、なんとなくは分かってきたんです。その7月に日本は日中戦争を始めまして、わたくしは旧制中学3年の時の敗戦にいたるまで8年余り、戦争のもとに過ごしました。「亜細亜の東日出づるところ…」もうこれは出だしから良くないです。日本はアジアの東部に位置している、アジアの一部だ、アジアの一員だ、という自覚はないんです。そういうものは持っていないのです。アジアのはるか東の方において、アジア全体を見はるかして、そしてアジアに君臨して、やがてアジアを侵略する、その歴史をわたくしどもは担っております。この「アジア」だけでも、別の大きなテーマです。よく言われます、「アジアとどう向き合うか」。ちょっとこの言い方も、わたくしは腑に落ちない。「アジアとどう関わるか」。こっちがどう関わっていくのか、これもやはり

りいただけない。わたくしにとっては、アジアとどう「付き合っていくか」、アジアの人とどのように友だちとして付き合っていくのか。これだけでも、別のひとつの研修会が必要です。一番当たっている言い方は、アジアの一員である日本、アジアの一員として生きる、これがなければこれからの日本の進む道はありません。

この「明治節」という歌は非常に良くできた歌でありまして、整然とした作りになっています。1番の終わりから2行目をご覧ください。「教あまねく道明らけく」、「明らけく」は明治の「明」。最後の行をご覧ください。「治め給える御代尊」、「治め」が「治」です。「明治」ですね、これを歌い込んでいる。2番にいきますと2行目に「御稜威（みいつ）の風は海原越えて」。ここで「みいつ」を、わたくしは初めて耳にしました。3番をご覧ください。3行目「定めましける御憲（みのり）を崇（あが）め」。みのりの「のり」は憲法の「憲」であります。明治22年に大日本帝国憲法は発布されました。その次の行をご覧ください。「さとしましける詔勅（みこと）を守り」。これは明治23年の教育勅語。大日本帝国憲法と教育勅語、これを並べました。そして終わりから2行目「代々木の森の代々とこしえに」。明治神宮です。まさに明治天皇を記念するためにこの明治節を定め、全国公募してこの「明治節」の歌詞が採用されたのです。

ところで「みいつ」、どういう風に書き表すのでしょうか。ここに記してありますように、「稜威（いつ）」に尊敬語「御」をつけて「御稜威」と言ったのであります。ただし、この2つの漢字だけで「みいつ」と読んでいました。古くはこの2つの漢字をひっくり返して書いて、これを「みいつ」と読んでいた時代もあります。最初の漢字「稜」は「とがった角、山の稜線、際立って神々しいありさま」。「威」というのも厳かさや勢いを意味しますから、「威厳」とか「威力」。日本語で「威光」という単語も耳にします。それから厳かという漢字を書いて

「いつ」と読むこともありました。今、「厳島神社（いつくしまじんじや）」という風に発音しますし、「厳原（いずはら）」という町もあります。

ところで、「みいつ」というのは神聖である、威力が強い、天皇や神などの威光を表すと辞書にありますが、辞書によっては天皇だけを書いています。

「天皇の威光、威勢を表す」。その部分で「明治開国期」と誤って書きましたが、そこを修正してください。「明治政府成立期」。明治維新で新しい政府ができた「明治政府成立期」。開国期というのはもっと前、幕府の時代であります。明治から昭和戦争期にかけて、もっぱら天皇に限定して用いられた天皇制用語の最たるものが「みいつ」です。「天皇陛下のおおみいつ」と、こう言っていたんです。戦争中は、なれなれしく不用意に学校の先生が「あのねー、天皇陛下のねー」そんなことは言いませんでしたね。どういう風に言うかということ、先生が「おそれおおくも」と。それを聞くと我々も背筋を伸ばして姿勢を正す。「おそれおおくも、天皇陛下におかせられましては」こう言っていたんですがね、それが「みいつ」なのです。

明治期には「威光」という漢字に「みいづ」というルビを振ったり、それから「御稜威」と漢字でわざわざ書いておきながら「ごいこう」というルビを振ったりしておりました。明治時代は非常に自由自在でありまして、殆どの場合はこのルビの方が本文なのです。そして漢字は、漢字の分かる人はこれを分かってくださいよという意味でつけておりました。そのようないきさつを経て、昭和期には、「みいつ」ということがもうただただ天皇にだけ用いられていたのです。徳川家の御威光、御威勢、その次の行の御武威。「武」というのは武力です。徳川家の場合には軍事と政治とが一体でした。軍事政権ですから。三つ葉葵の紋がある、この紋が目に入らぬか。そして、土下座をする参勤交代、大名行列。千代田城、江戸の都市計画、多摩川用水、そういうのは全部、まあ民間が始めたにしても江戸幕府がこ

れを管轄していました。日本橋も江戸幕府が作ったのです。そこでは既に中央と地方、この構図がはっきりできておりました。徳川将軍は対外的には「大君」と書いて「たいくん」と呼ばれていました。それが実は明治政府になりますと、天皇だけにこれをつかい、「おおきみ」と発音するようになりました。徳川家の三つ葉葵の紋に対しては天皇家の菊の紋、日の丸、旭日旗、君が代。侵すべからざる尊厳、これが天皇のものである。天皇を神さまとして崇める。長い間この考えは続きました。

2. 諸賛美歌集での「みいつ」の用例

資料の2頁に移ります。明治以来の賛美歌集で「みいつ」がどのように用いられて来たのか、この年表を書いてきました。賛美歌だけの年表ではなくて、明治政府ができてからどういうことがあったかということ参考に、混ぜて書きました。明治元年、天長節を定め、明治2年には東京招魂社、これは今の靖国神社です。4年には戸籍法、文部省。5年には陸海軍省、学校制度が定まる。戸籍法、これは税金を取るためのもの、徴税です。徴兵令、これは明らかに兵隊さんを徴収する。軍隊と学校、これらは一体化されていました。このようにして明治政府は始まっていて、国民を支配するその体制を着々と作ってまいります。その中であってキリスト教の教会が賛美歌の中に、神の「みいつ」と歌うようになりました。明治7年、明治9年。その明治9年の下に落としましたので、ぜひ挿入してください。1877年（明治10年）メソジスト教会の賛美歌、ここに1曲「みいつ」を含んだ賛美歌があります。それから少し下りまして明治17年、「メソジスト系譜附基督教聖歌集1曲」と書いてありますが、これを「2曲」と直してください。これをずっと下まで見てまいりますと、日本のキリスト教会がどのように「みいつ」を賛美歌の中に取り入れてきたのかということ

がよく分かります。ずっと下りまして、1943年、44年、このところに目をとめていただきますと、『興亜讃美歌』、それから44年には『日曜学校讃美歌』があります。昭和18年のところには『興亜少年讃美歌』もあります。この『興亜讃美歌』『興亜少年讃美歌』『日曜学校讃美歌』の復刻版がここにおられる辻子実さんの手によって2013年に出版されました。これらを読んでまいりますと、日中戦争、アジア太平洋戦争、その末期にどれほど教会が教会としての立場を自ら明らかにせず、「みいつ」を使い、あるいは天皇制用語にどっぷりと浸かってきたかがよく分かります。未だに「みいつ」を引きずっている、この現実をこの年表から読み取っていただきたいのです。

原稿をお送りするときに書きませんでしたので、今記していただきたいのですが、ちょうど真ん中あたりの1931年（昭和6年）、このところ左側に1センチ位線をお引きになってください。それからずっと下りまして、1945年、ここで左側に1センチほど横線を引いてください。そしてここを縦線で結びますと昭和6年から昭和20年まで、これは「15年戦争」と一般に呼んでおります。それからもう少しずっと上に上がっていただきまして、1894年（明治27年）日清戦争です。ここのところで左に2センチほど横の線を引いていただいて、1945年の敗戦のところでもたもうちょっと左に線を引いていただいて、これを縦線で結びますと、「50年戦争」です。日清戦争から敗戦にいたるまで。そしてずーっと下の2012年、その下に今の2015年を記入していただく。そしてここで横線を左に伸ばして1945年と縦線で結びますと、70年の平和です。50年の戦争、70年の平和。そうしますと、上の方はどうなるのでしょうか。明治維新から日清戦争まで、これもまた横線を引いていただいて、縦線を引きますと、戦争準備の25年です。明治政府が発足してから、戦争を準備する、そして50年戦争を戦う、敗戦を迎え、70年の平和。この中であって、キリスト教会の立ち位置がどうい

ものであったかということ「みいつ」という言葉を参考にするだけでもわたくしどもの勉強になります。

3. 唱歌と戦時歌謡に歌われた「みいつ」

3頁目にいきます。明治時代の学校唱歌、それから戦争中の歌でどのように「みいつ」が歌われたか。明治42年、女声の唱歌でベートーベンによる「自然における神の栄光」というのがありました。「荘厳（おごそか）の神の稜威（みいづ）、蒼空（みそら）にとどろき」。これは今でも高等学校の音楽の教科書にあるそうです。この曲は聖歌にもありました。1932年（昭和7年）の『尋常小学唱歌第六学年用』に『天照大神』というのがあります。私も歌った覚えがありますが、「かがやく御稜威まのあたり、今も昔も天照らす、神の護（まもり）ぞいちじるき」。やがて1941年、小学校が国民学校に変わります。5年生用の『初等科音楽三』に『戦友』という歌がある。「御稜威（みいづ）あまねき大東亜、朝日の御旗行くところ、あだなす敵のあるかぎり、撃ちてしやまんきみとわれ」。かの有名な「撃ちてしやまん」です。「みいつ」-天皇のみ栄えのためにということなのです。「朝日の御旗」というのは旭日旗です。日本陸軍の軍旗であると共に、日本海軍の軍艦旗でありました。日の御旗というのは日の丸のことであります。旭日旗は今も海上自衛隊の隊旗であります。しかしそればかりではありません。サッカースタジアムに旭日旗がある。ヘイトスピーチ、これに旭日旗が伴っている。街宣車にも。オリンピックもそうです。今年の箱根駅伝をテレビで見えていましたら、箱根駅伝にも旭日旗があるんです。Tシャツに旭日旗がありました。各年齢層で、旭日旗を見てどういう意識にに至るかということの本格的な論評が欲しいのであります。この旭日旗を見てアジアの方々がどう思うか、これをこそ、日本

は今考えなければいけないと思います。明治27年には、日清戦争の祝捷大会を記念しまして民間の唱歌『旭日旗』ができます。「あさひのみはた、あさひのみはた、さかまく浪のうみの外、かすみへだつる国までも、ひかりかがやくいきほひは、わがおほ君のかしこき御稜威（みいづ）」。わがおほ君の一天皇の、非常に厳かなすぐれた御稜威（みいづ）である。「わがますらおのいやたけごころ、むかふかたきのあるべきか、帝国萬歳、萬々歳」。これが日清戦争。これ以来50年、日本は侵略を重ねました。日中戦争、アジア太平洋戦争。明治27年の日清戦争の時代にこれがありました。

日中戦争の時代ですが、昭和14年に、ここには書きませんでした『出征兵士を送る歌』というのがあります。「我が大君に召されたる、命はえある朝ぼらけ」。これを学校で習って歌っていました。昭和12年には『海ゆかば』です。あのメロディーを忘れることはありません。本当に、何か迫るものがある。言葉では言い表せない悲壮感漂う『海ゆかば』です。「大君（おおきみ）の 辺（へ）にこそ死なめ」、天皇陛下のために喜んで死んでいくのだと。昭和の戦時期にはここに書きましたような歌が次々にできました。レコード業界にとってはこのアジア太平洋戦争というのは大きなビジネスチャンスだったんです。そういう観点から本を書いている人がありまして、辻田真佐憲という人の本を読みますと非常に興味深いです。『日本の軍歌』。軍歌とは何か、軍人が歌う歌だけではないのです。おおよそ戦争に役立つ歌、これが軍歌です。

4. 賛美歌集での「みいつ」をどうすればよいか

それでは、4頁目にいきましょう。賛美歌集にある「みいつ」を一体どうすればいいのだろうか。明治政府成立期以来、ここも直していただきたいのですが、神権天皇制と軍国主義、これに絞られた言葉

が「みいつ」、非常に特殊な言葉であります。「みいつ」を耳にして漢字を思い浮かべるといことがきわめて無理になります。どうすればいいですか。もう全て賛美歌集から取り除く。重版の段階で留意する。あるいは「みいつ」を含む曲を選ばない。また、仮に選んだ場合にその場で、礼拝あるいは祈祷会、家庭集会の場で「ここには『みいつ』があるから、ここは『誉れ』に言い換えましょう」ということでことが済むと考えてはいけません。教会として、教派として。単なる読み替えで済むような問題ではなく、あくまでも歌集の改定に努めていくべきです。『新生讃美歌』の18番に「みいつ」が出てきます。

わたくしは特にここには書きませんでしたでしたが申し上げたいのは、『新生讃美歌』の274番、275番、276番で歌われている賛美歌、これは中田羽後さんの著作権で、聖歌でもうたわれている。この賛美歌は実は太平洋戦争中に朝鮮半島で朝鮮の教会の人々が歌っているのを、特別高等警察（特高）、憲兵隊からとがめられて、これは歌ってはならないと禁止された歌なんです。イエスキリストにこそ冠をささげよ、天皇陛下とキリストとどちらが偉いのだと。そのように禁止された歴史的な事実がある。そうしますとみなさんがこの『新生讃美歌』をお使いになるときに、この274と275と276はもう選曲からはずしましょうというだけでことが済むか。私は済まない。あの朝鮮半島で迫害を受けたキリスト者がどれほど愛して危険を顧みず歌おうとした賛美歌だったか、そういうことをよくよく覚えた上で、この歌をどうにかしてまた取り戻して、これを心から歌うことができるようにと、このようにわたくしは、他教派の会員でありますけれどもみなさんに心からお願いしたい。重版に当たってひとつの言葉だけを変えて刷ることができるか、これは難しいことだと思います。著作権を持っておられる方が承諾なさればいいんですけれども、そうでない限りは難しい。けれどもこれをどうするか。今申しましたことをわたくし

しは、戦後相当経ってから知ったんです。旧植民地朝鮮にいる時に父から聞いてそれを自覚したと、そういうようなことは全くありませんでした。しかし今歴史を勉強して、その当時苦しんだ方々、立ち上がった方々と連帯するためには教会としてどのようにすべきか。次には2.11や8.15の機会に、是非「みいつ」を用いてきた事実の学習をしてください。そしてアジアの方々とどのように友だちとして付き合い合っていくのか、アジアの一員としてどのように生きていくのか、このような事柄を真剣に考えなければ、私たちはキリストの証しを充分にすることはできません。

「みいつ」を反面教師としまして、もっとふさわしい言葉はないだろうか、様々な勉強をしていきたいのです。参考として記しました『教会福音讃美歌』（2012年）253番は勉強になりました。「世界中どこでも新しい歌をささげよ／主に歌えほめたたえよ／みすくいの知らせを告げよ」。次は主告白です。「まことに主は大いなる方／讃美されるべき方／威光と尊厳と栄誉／光栄と力／ただ主だけを礼拝せよ／天を造り支えている主」。創造と摂理ですね。こういうすばらしい歌があるにもかかわらず、この歌集では2012年の段階で「みいつ」があらわれる、1ヶ所（39番）。残念であります。旧約聖書歴代誌上の29章には、ここに記しました単語が出てきます。単語どころかこれこそがわたくしどもの神告白です。神さまを告白する言葉ですね。偉大さ、力、光輝、威光、栄光、富、勢い。これはわたくしが所属しております日本キリスト改革派教会の信条であります「ウエストミンスター大教理問答、小教理問答」に出てくる聖句です。主の祈りの結びの言葉「国と力と栄とは」—これは歴代誌上の29章にある通りです。色んな言葉が聖書に出てまいりますから、賛美の言葉を正しいもの、豊かなものにするためには、やはり聖書の言葉に学ぶ他はないのです。そうしますと、ここに一覧表を掲げておきましたのでよくご覧いただき、このようなことをきっかけに

して触発されながら、皆さんもこれに書き加えていただきたい。一番右側に「主権」と記しました。これに2行目に足していただきたいのです。「気高さ」。神さまの御名は気高い、崇高である。主権と気高さ、皆さんがこれをより豊かなものにしていただきたい。このような単語が独立して現れるだけではなく、複合されていく、その奥行きであるとか、深さとか、豊かさを味わっていただきたい。そのためには詩篇を繰り返し読む、詩篇を自分の口に出して読む。読むだけではなく、口に出して賛美し、告白する。詩篇はその意味で、賛美の宝の蔵であります。この上の一覧表をご覧くださいと、左から3番目の欄に「威力、力、勢い」。今年の初場所があります、幕内の西前頭二枚目に「勢（いきおい）」という力士がいる。この準備をしていた時です。「いきおい、がんばれよー」と応援しました。ところが1勝14敗です。その「勢い」の右の欄、「輝き」。同じく十両に「輝（かがやき）」というお相撲さんがいます。以上です。（笑）

5. 「ミタマ」を耳にして何を思い浮かべるか

5頁。今度は「ミタマ」を耳にして何を思い浮かべるのか。容易に思いつく用例を集めると、一般に「先祖のみたまを祭る」「みたまを安置する」とか、「戦没者のみたまよ安らかに」「みたましずめ」と言いますね。「みたま」というのは、死んだ人の靈魂を指す日本語であり、尊んで言う語。表記はここにある通り、「霊」という漢字を用いる場合、「魂」という漢字を用いる場合、様々な単語がここに出てまいります。右側に申しましたように「霊」ということは特に「慰霊」ということ、霊を慰める。これも非常に日本文化としては大きな大きな問題であって、私ども政教分離をモットーとするキリスト者にとりましては非常に大きな問題です。「魂」「たましずめ」「ちんこん」そして慰霊に並

ぶものが「招魂」。死者の霊を招いておまつりする。明治初年から天皇のために、国のために命をささげたその人々をたたえ、後に続くものの規範としたのです。

6. 「靖国」にまつわる「みたま」の特殊な用法

6番目にいきますと、やはり「みたま」というのは「靖国」にまつわるキーワードです。特殊な用法を天皇の政府は国民に植え付けました。国家のために死んだ者を天皇の名において祀る。様々な招魂社が建てられていくのですが、東京招魂社は明治2年、九段に創建されて、12年に靖国神社に改称いたしました。以来この神社は国民の思想と行動を天皇のもとに束縛する国家神道の支柱となったのです。他方、全国各地に戦没者の霊を祀る招魂社が建てられていき、昭和14年には護国神社と改称しました。日本中に護国神社がありますので、靖国に霊が祀られている、そして地方の護国神社にもやはりその戦没者の霊が祀られていきます。

護国神社に参拝させるということ、これはじつは小学生、中学生にとりましてはもう神社は天皇制教育の教室だったんです。神社の玉砂利を踏みしめて歩きました。こういうことを考えながらの間散歩してましたら、今の小学生がはいているスニーカーというのは底が厚くて立派なものです。それを見る度に、ああ我々が小学校に行っていたときはもうゴムは南方から入らず、薄っぺらで、運動会の練習なんかしていたらもう裏が、底が磨り減って、砂が入っていた。そういう運動靴、ズック靴、これを履いて神社の玉砂利を踏んでごらんください。足の裏から天皇制が分かってくる。もう本当にね、頭のとっぺんからつま先まで、足の裏まで。玉砂利も教育なのですね。これが「みいつ」の教育なのです。全国に招魂社ができましたが、これは九段の靖国神社の伝道所なのです。郷土の英霊をおまつりして顕彰す

る。天皇が靖国に参拝をする。参拝をするということは、そのことによって死んでいった人々を手本とし、そしてこの功績を称える。靖国に祀られた霊は次のように呼ばれました。「御霊（みたま）」「亡き父の御霊（みたま）」「戦場に散った夫の御霊（みたま）」、神霊とも。「靖国の御霊（みたま）」「靖国の神」「靖国の英霊」「護国の神」「護国の英霊」…色々と言われてきたのです。そして戦争が生み出したのは、本当にかわいそうな家族です。夫を失い父を失った「誉（ほまれ）の遺族」「軍国の母」「九段の母」「靖国の妻」「靖国の遺児」。お父さんを戦争でなくした子ども達を全国から国家の費用で集めて、そして靖国神社に参拝させる。そういう授業を行うことによって、子ども達を、全国民を、戦争へと駆り立てていきました。

この下の方に『初等科修身二』国民学校四年生用の修身の本がある。「靖国神社には、君のため国のためにつくしてなくなった」、その次に「君のため国のため」、その次の段落もそうです。君のため国のためにつくさなければなりません。この原型は大正9年に遡ることができます。修身というのは今の道徳。文部省は修身と国語と唱歌—今の音楽、それに習字—書道、これをもってこどもたちに体で分かるようにと教育したのです。戦争が激しくなるまでは、習字の時間に「青い空 白い雲」と。三字と三字でよくできていたんです。段々と戦争が激しくなりますと「撃ちてしやまむ」。で、そういう話を昔の友だちとしていまして、上海に住んでいた友だちなのですが、上海の小学校で「大内山 松の緑」と書いていた。「大内山」、皇居です。「大内山 松の緑」天皇制教育です。ある人が自分たちの学校で、小学校4年生ですよ、「靖国神社」と書いていた。それを読んで、そうか帝国の小学校、国民学校で、習字の時間にそういう天皇制教育が行われていたんだと、つくづく思いました。これも、この講演の準備をしているときたまたま新聞を読んでいましたら、全国の小学生の書道展で、トップクラスの人

の文字が出ていたんです。兵庫県加古川市の小学校4年の女子生徒。何て書いたかというところ「ざるそば」と書いてあった。ああそうか、昔は「靖国神社」。今は平仮名で「ざるそば」。平和ですよ。いつまでも「ざるそば」でなきゃいかん。「そうめん」でもいい。つくづくわたくしは思います。戦争が激しくなったときわたくしはもう中学生になっていましたから、三八式歩兵銃を持って軍事教練をやっていました。ですからもっと下の学年の人が「靖国神社」と書いていたかどうか、そういうことを確かめるすべもありませんでした。

6. 「みたま」の特殊な用法

6枚目にいきます。明治17年に既に『招魂祭』という歌がありました。靖国神社です。「ここにまつる君が霊（みたま）」。2番です。「ここにまつる。戦死の人。骨を砕くも。君が為。」「国のまもり。世々の鑑（かがみ）。」国のため君のため。次に、昭和7年の尋常小学唱歌『靖国神社』。「花は桜木、人は武士。」その4行目「御国の為に、いさぎよく／花と散りにし人人の／魂（たま）は、ここにぞ鎮まれる。」2番「命は軽（かる）く、義は重し。／その義を踐みて大君に／命ささげし大丈夫（ますらお）よ。」大君なんですよ。国の為、君が為なんですよ。昭和15年には『靖国神社の歌』ができました。「日の本の光に映えて／尽忠の雄魂祀る／宮柱太く燦（さん）たり」。その次「ああ大君のぬかずき給う」。天皇が参拝してくださる。天皇の「親拝」と言っていました。「しん」は「親しい」。栄光の宮靖国神社。2番「日の御旗断乎と守り」、日の丸。「その命国に捧げしますらおの御霊鎮まる」。3番「報国の血潮に燃えて／散りませし大和乙女（をみな）の／清らけき御霊安らう」。大和乙女、従軍看護婦です。

このように小学校の修身、唱歌、習字、国語、

様々な場面で靖国が歌われて、そして大君が賛美されていた。靖国は戦没者の家族にとっては非常に大きな存在です。なぜ夫が、父が、戦争で命を奪われなければならなかったのか。祀られ、魂が鎮められている、そのようなことで真の安らぎと希望を持つことはできないでしょう。多くの兵士が靖国の桜の下で会おうと、こう言って出撃して行った。特攻隊だけではなく。地上戦で、南方で、どれだけの人が無念の死を遂げたか。南方の激戦地から自分は生き残って帰ってきた人が、靖国に行って、そしてあの最前線で亡くなった戦友のことを深く思った。そして自分はその靖国の桜のもとで亡き戦友を思いながら「天皇陛下ばんざい」と心の中で言っていると書いてあります。ところが皆さん、その人が書いた「天皇陛下ばんざい」の「ばんざい」という漢字をわたくしは見て、涙がこぼれました。ばんざいの「ざい」は「罪」なのです。自分は生き残って、復員し、生き延びることができたけれども、戦友は命を失った。生き残ったことの後ろめたさ、悲しさ、無念さ、これを「サバイバルギルト」と言いますが、その人は天皇の戦争責任をそのように断罪し、「罪」の漢字に託した。それを印刷することができて、それが多くの人目に留まる。これこそ、あの戦争を経てきた我々にとっては、大きな事柄であります。やがてそういう情報を出すことが阻まれていく、そのような風潮と戦っていかなければなりません。

全国戦没者追悼式の総理大臣の式辞で、「みたま」が用いられます。この追悼式が8月15日に恒例化したのは1963年、日比谷公会堂。それから64年には靖国神社の境内で行われました。65年以降は現在の日本武道館です。「戦後の平和と発展・成長は戦没者の犠牲のおかげ」だ、「多くのみたまの強き願いがそこにあった」、「平和の礎となってくれたから今の日本の安定と繁栄がある」と、式辞の中で歴代の首相が言い続けてきた。これを「平和の礎石論」と言います。実際に最前線で戦った人々が、

そのような思いで戦ったのかというと、そうではありません。まさに政府は、軍は、補給もせず現地調達ということの方針として、多くの将兵を最前線に送ってその命をむざむざと奪っていった。多くの場合にそういう理不尽の死、無念の死を遂げた兵士、一般市民の胸中を察する言葉はありません。実際あるのは、あなた方のおかげで今の平和がありますというそういう言い回し。だから慰霊し、尊び称え、顕彰する。本当ならば夫を奪い父を奪った、それは国家としてなすべきことではなかった、との国家の謝罪に基づく追悼でなくてはなりません。慰霊というのは、国家がやるべきことではなく、それぞれの宗教にのっとして家族がやることです。国家がやるべきことは謝罪なんです。何十年経っても、その謝罪が総理の口から出されないでずっときている。重いことであります。

7. 諸賛美歌集での「みたま」

7頁。色々な賛美歌集で「みたま」がどう使われてきたか。『明治版』というのは明治36年版のことですが、その前にまだ前段階がありまして、レジメには書きませんでした。明治7年から9年、明治7年8年9年、そこでは多くの場合に「聖霊」という語が使われています。漢字の「聖霊」、平仮名の「せいいい」。それが明治10年位になりますと「みたま」になってきます。そして『明治36年版』はもっぱら平仮名の「みたま」、漢字の「御霊」はありません。『昭和版』というのは昭和6年版(1931年)、もっぱら「みたま」です。『1954年版』ももっぱら「みたま」。そして漢字の「御霊」もあります。『昭和版』にもあります。『讚美歌21』は「聖霊」に戻りました。明治の初年に戻りました。これは新共同訳聖書にのっとしてのことです。『新生讚美歌』は慎重に漢字の「御霊」を避けました。そして表記を平仮名の「みたま」そして

「み」は平仮名で「霊」は漢字、それから「聖霊」と書いて「みたま」というルビを振り、それから積極的に「聖霊」を採用しました。このことについてはまた次のページで申します。

『新生讃美歌』では、三一の神を言い表すのに「父み子み霊」、色々な表記があります。今回、非常に勉強になりました。どういう意図で、どういう工夫を施してこの2003年版をお作りになったか、その労苦のほどを垣間見ることができました。そこで、最も身近な「みたま」というのは頌栄の、これは曲名であります『ORTONVILLE』に見られます。明治版・昭和版と小さな違いがありますけれども、「父、みこ、みたまのおおみかみに」、「ときわにかきわに」あるいは「ときわにたえせず」、「みさかえあれ」。これを私どもは歌いこんできたのです。ところが『讃美歌21』では「父・子・聖霊のひとりの主よ」、『新生讃美歌』では「ちち みこ せいの主なるかみに」。日本聖公会『聖歌集』では「父 み子 聖霊 ひとつの神」。『讃美歌21』では「父・子・聖霊のひとりの主よ」、聖公会は「父 み子 聖霊 ひとつの神」。わたくしは聖公会の方が三位一体を神学的に正確に表していると思います。そこで明治版・昭和版・1954年版で使ってまいりました「父、みこ、みたまのおおみかみに」。この「おおみかみ」。わたしにとりましては子どもの時から、これは、やはり、天皇制のかみ、みかみ、おおみかみ、こうなります。もちろん教会で、家庭で、聖書を習っていました。けれども学校教育は強いですから、「天照大神(あまてらすおおみかみ)」ですよ、おおみかみと言え。今回この講演を依頼されて『新生讃美歌』をよくよく勉強いたしました。328番1節「全能なるおおみ神は」とあります。これはやはり賛美歌検討委員会議の次なる検討課題に違いないと、このようにわたくしは推察しております。これが翻訳されましたのは1963年のことですから、そのあとずっと、とくに2003年版を準備なされた段階で、この「おおみ神」という用

語についてどのようなご議論があったのか、またお教えいただきたいところでもあります。

もうひとつの頌栄、覚えておりますのは『あめつちこぞりて』ですね。『OLD HUNDREDTH』こう言いますが、明治版・昭和版・1954年版は、句読点の違いはありますけれども「みめぐみあふるる／父、み子、みたまを」とこういう。『讃美歌21』では「ちち、子、聖霊を」となりました。『新生讃美歌』では「めぐみのもとなる／父、み子、聖霊」となっています。これを翻訳されましたのは1989年でありますから、明らかに1997年の『讃美歌21』を先取りしており、これは特筆すべきことであります。頌栄というのは信仰生活、礼拝生活にとって非常に大きな意味を持っています。そして賛美歌の終わりの方に収録されているいわゆる頌栄とは別に、賛美歌のあちこちに、1節から4節までであるとしますとその4節の最後のところに三位一体の神が賛美されている、そういうケースが明治以来ずっと続いていますから、そういうところを考えてみます。『新生讃美歌』にもありますが、そういうところを考えると、やはり頌栄ということをもってわたくしどもが信仰の真髓を非常に凝縮して神さまに告白することができる。歌でもって。これは大きな大きな祝福であります。三位一体の神を礼拝の度に告白する。三つの位格があります。ちち・み子・聖霊。けれどもそれはひとつの神で、統一体なんです。本体はひとつです。「三位一体」という一体の「体」は「本体」。三つの位格があるけれどもひとつの本体がある、統一体がある。本質の実体はひとつの存在であると、このように告白しながら、ずっと歌い続けてまいりました。

ここで、下の方に書いておきましたが、日本の教会では『ORTONVILLE』の方がよく使われてきたんです。けれども他の教会・教派を考えますと、他の国では、ほとんど歌われてなく、日本だけではないかという指摘もあります。これに対して『OLD HUNDREDTH』、詩篇100編、これは日本中で歌われてき

た頌栄でありまして、これだけは、要望であります
が、日本中で共通の歌詞、同一の譜として欲しいの
です。同じことは「聖なる聖なる聖なるかな」につ
いても言えます。わたくしはこの「あめつちこぞり
て」と「聖なる聖なる聖なるかな」、この二つだけ
は、日本中で同じ歌詞、同じ曲にして欲しい。その
意味では『新生讃美歌』の第1番「聖なる聖なる聖
なるかな」、これを手直しせずに昔からの歌詞で収
録されているということは、私にとって本当に力強
いことでありました。そして第2番は『来たれ全能
の主』、明治の時代からずっと使われてまいりまし
た賛美歌が収録されています。この1番と2番のペ
ア、セット、これは非常に大きな意味を持っている
と思います。わたくしがアメリカに留学したのは
1956年のことでしたが、南部長老派の神学校でし
た。当時の南長老教会の礼拝と生活に馴染んだ時期
がありました。その長老派が出しておりました賛美
歌集、1940年が初版なんです、その1番が「聖な
る聖なる聖なるかな」なのです。わたくしは『新生
讃美歌』を手にしまして、1番に「聖なる聖なる」
が出ていることはすばらしいことだと思いました。
各教派申し合わせして、この二つだけは日本で統一
して欲しい。なぜそういうことを言うかといいます
と、わたくしもこの歳になりまして、様々な関係の
方々の葬儀に出席する。他教派の会員の方の葬儀
にも出席すると、「聖なる聖なる」「あめつちこぞり
て」をとってみても、その教会で使っている賛美
歌集から作ったプログラムがありますから、やはり
歌っている時に、戸惑うときがある。これだけは、
お葬式においては、そして日本人だけでなく、や
はり諸外国から日本に住んでらっしゃる方々のこと
を思いますと、やはりこれはもうグローバルズム
で、このふたつは共通であって欲しい。そういうこ
とを今回講演の準備をしながらつくづく思いまし
た。

8. 賛美歌集での「みたま」をどうすればよいか

8頁。では「みたま」をどうすればよいのでしょ
うか。容易な答えはありません。『讃美歌21』では
「父、み子、みたま」に代えて「父、子、聖霊」と
いう表現を用いました。「誤解を招く可能性のあつ
た『みたま』は使われなくなりました」と注記され
ています。靖国の思想にまで踏み込んだかどうか分
かりません。おおよそ神さまについて尊敬の表現を
用いる。ここに例としてあげました『新生讃美歌』
の343番、573番をご覧になっていただければ分か
ります。『新生讃美歌』がどういうふう克服しよう
として試みられたか、「みたま」と発音して、様々
な表記を用いました。そして「御霊」と書いた「み
たま」は、これは意識的に避けました。そのこと
によって死人の霊への連想を排除しました。日本バプ
テスト連盟の長きに渡る「ヤスクニ」問題への取り
組みからいたしますと、「靖国の御霊」、これを思
い浮かべるということを排除した、鋭い見識がうか
がえるのであります。「聖霊」と書いて「みたま」
のルビを振る、そういう知恵を働かせた。12回あ
る。実はこの表記は明治の昔からのことなのです。
わたくしは評価する意味で、知恵を働かせたことに
大きな敬意を表します。けれども、今の中学生、小
学生は、「聖霊」と漢字で書いてあるのにどうして
「みたま」と読むのかと聞きますよね、やはり。そ
うすると教会外部の人は、そんな独善的なことを教
会さんはやるんですかと、おっしゃるでしょうね。
ですから「聖霊」と書いて「みたま」とルビを振
る、これでことは済みません。漢字で「御霊」と書
くよりは良いということは明らかでありますけれど
も、このルビの振り方を奇異に感じる人はありま
す。ですからこのルビは、いわば逃げの一手なん
です。だからそれでよいかというと、やはりよく
ない。どうしても「みたま」という音が耳に残るか
ぎりは、よくない。このようにわたくしは思うに至
りました。

やはり「聖霊（せいれい）」というこの用例を、今は20回を超えておりますが、将来はこれを増やす道を模索されるのが、真っ当であると思うに至りました。将来的には「聖霊（せいれい）」にそろえる。しかしそれをどのように技術的にやれるのか。著作権の問題がありますから、この言葉だけを変えたいのですがと、そのご遺族のところをお願いに行く。承諾されるケースもあり、されない場合もあるだろうと。実際にこの『新生讃美歌』の説明を見ますと、日本福音ルーテル教会の『教会讃美歌』の中の何曲か、6曲か7曲分ですか、それは言葉を取り替えるということについてご了承を得ましたという但し書きが付いているほどでありますので、その承諾を得るということから難しい問題。そうすると現場でこれを言い換えて歌い、それで済んだと思っても、やはりわたくしは率直に言ってそれも良くないと思う。やはり長年の努力を重ねて、著作権の問題を克服して、そしてそこでどうにか真っ当な道を探していくことができるようにと願っているのであります。

それは、どういうことかという、『1954年版』をわたくしども日本キリスト改革派教会の多くの教会が今でも使っています。『讃美歌21』に切り替えた教会もありました。けれども私自身が『1954年版』を使い続けるかぎりには、その場その場で、こういう天皇制の背景がある、それを今も使っている、これをどうすれば良いか、一步でも前に進めるためにはどのように考えていくのが良いのか、どのように行動するのが良いのかと、こういうことがやはりこれからの問題として、残ってくるのでありますね。下の方に書いておきましたが、「せいれい」と置き換えたことによって、どうして

もね、歌う技術面からしますと、「みかみ」「みちち」「みたま」としていると収まりがいいんですね。しかし「せいれい」としますので、2音節の「せい」を、1拍でやってしまうと無理がある。無理があるとやはり歌いにくくなる。ですからどうしても、窮屈感を否めないのです。その窮屈さをどう解消するか。賛美歌検討委員会の方々は、楽理を勉強なさった方、現場の経験の長い方ですから、こういうふうにご歌詞を変えて、この曲だがこのように歌詞を変えて歌いましょうというときには、それはもう専門家ですからその音符に即合わせて歌うことができるのです。で、わたくしの具体的な提案としましては、委員会が6~7人の方々をその委員会室にお呼びして、A案B案の楽譜を示して、このように歌詞を改定したいからこれで歌ってくださいとお願いして、楽理を勉強していない方々が6~7人さっと歌えれば、それは良いとおもいます。もし難しそうだったら、その易しい方に、安易な方に、小学生、中学生でもついて行けるような方にやって欲しい。わたくしは欲望が深いですから、そういう段階を経て、次の段階として、30人位の会衆のところ、その新しい歌詞を持っていく。そしてこれで歌ってみてくださいと実験する。その実験結果を持ち帰って、委員会が最終決定をすると、現場の歌いやすさに基づいて、心からこの歌詞で、この音符で歌うという、礼拝を形作っていくことができる。そしてこの無理なく歌えるということが、その賛美歌が生き残っていく道なのです。生き残っていく賛美歌には力があるのです。それが子どもや孫に伝えられていくのです。次の世代にもそれが伝えられていくのです。以上です。ありがとうございました。

